大学院入試勉強会クマグス
2008 年 10 月 29 日（水）
発表者：近藤祉秋（早稲田大学国際教養学部 4 年）

読書会レジュメ

【使用テキスト】ノルベルト・エリアス『社会学とは何か―関係構造・ネットワーク形成・権力』法政大学出版局、1994 年

1. ノルベルト・エリアスについて

(ア)『社会学とは何か』における紹介文

「1897 年、ブレスラウ生まれのユダヤ系ドイツ人社会学者、リッケルト、フッサール、ヤスパースらに哲学を学び、アルフレート・ウェーバー、マンハイムのもとで社会学の研究に従事。ナチに追われてイギリスに亡命。社会学者として数多くの大学で教鞭をとる。社会学・心理学・歴史学を総合する該博な知識に裏打ちされたユニークな研究は注目を集めている。『宮廷社会』(69)、『文明化の過程』(69)、『社会学とは何か』(70)、『参加と距離化』(83)、『死にゆく者の孤独』(82/85)、『モーツァルト』(91、以上法政大学出版局から邦訳既刊）、『諸個人の社会』(87)など英語とドイツ語による多数の著書がある。1977 年、フランクフルト市創設の第一回「アドルノ賞」を受賞。1990 年 8 月死去。」(94 年版裏表紙)

(イ) 不遇をかこった理由←ヨーロッパ中心主義と進化論（近森 2001）
(ウ) さまざまな理論の包摂・・・アナール学派、フーコー、ブルデュー、マルクス、ウェーバー、フロイトの影響（大平 2001）

2. 『社会学とは何か』の解説

(ア) 序論

- 自己中心的な社会像⇒相互依存する諸個人の関係構造・・・強制力、
  ↑「フィギュレーション」
- 神話―呪術的なモデル対科学的なモデル・・・社会科学の相対的自律性
- 長期にわたる社会的な発展過程の問題→「文明化の過程」
- 科学の方が現実や事実に関係することが多い？
- 「膠着状態のクリンチ」・・・国家間の強制力

(イ) 第一章　社会学―コントの問題設定

- 社会学に実証性を持ち込んだコント
- 生物学的な還元主義への反発
- ｐ３２問題設定・・・社会学の自律性
- 哲学的な認識論⇒社会学的な認識論
- 部分の検討だけでは全体の性質を知ることはできない

(ウ) 第二章　神話の摘発者としての社会学者

- 科学の哲学的研究⇒科学の科学的研究・・・神話の摘発者＝社会学者
- より大きく、より正しく、より適切になっていく過程≠真偽/善悪
- いかなる条件のもとで非イデオロギー的で科学的な認識ができるか？
- 行為概念⇒機能概念
- 社会過程も諸個人の行動に対して相対的自律性を持つ
- 人間自身の社会的共同生活の変化→人間の自己経験の変化（社会→個人）
  ＝「文明化の過程」
- 発展の並行性・・・経済・政治・社会（例：税）

(エ) 第三章　ゲームモデル

- ゲームモデル≒強制力→権力（フーコーに似てる？）「相対的プレイ能力」
- 前ゲーム、二人ゲーム、多人数ゲーム、二階建てのゲーム
  →→→→→→→→→→→→→どんどん自分の裁量が減っていく→→→→→→

(オ) 第四章　人間社会の普遍要素

- 人間は生物学的特性を変えずに社会的生活を変えることができる・・社会化
- 状態還元への批判・・・変化は変化からのみ説明できる。例：風が吹く
- 自己から距離をおくこと『参加と距離化』→人間観の変化。代名詞

(カ) 第五章　ネットワーク形成の連関―社会的結合の問題

- 大規模な社会での感情結合（cf 小田 2001　真正な社会・非真正な社会）
- 生存単位・・・統合体（例：国家、ブルジョア、貴族階級）

- 発展と開発・・・全面転換が必要
- 不変なものの研究⇒変動に固有の秩序
- ｐ１９０　「三組の基本制御」

(キ) 第六章　社会発展の「必然性」の問題

- 今の構造は過去の構造からの可能な変動体系の一つ（可塑性）
- Ａ⇒Ｂ　ＢにとってＡは必要条件であるがＡから必ずＢになると予測できるわけではない
- 社会内と社会間の相互依存関係（階級闘争から植民地闘争へ）『文明化の過程』
- 発展にはある部分の興隆と違う部分の衰退がつきもの（発展の全面性）

3. 「文明化の過程」理論の展開

(ア) マナーの研究・・・・・・・・・・・・・・・・・メネル 1989
(イ) 暴力の行使『ドイツ人論』・・・・・・・・・・・・・内海 1998
(ウ) 人間観の問題・・・・・・・・・・・・・・・・・内海 1999、原田 2006
(エ) 自己抑制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川田 2001
(オ) スポーツ社会学『スポーツと文明化』・・・・大平 2003、マニング 2003
(カ) 芸術社会学『モーツァルト』・・・・・・・・・大平 2007
(キ) コミュニティ論『定着者と部外者』・・・・・大平 2005
(ク) 人類学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・野村 1980

4. 人類学における展開の可能性―食物禁忌に関する試論

(ア) 「発展」「二重拘束」「現実―適合的」などの再検討の必要性・・・近森 2001

- 「発展」→「変遷」
- 「二重拘束」→「動物観」・「自然観」・（「人間観」）
- 「現実―適合的」→「文化―適合的」（ex.ウォーフ＝サピール仮説）

(イ) テーブルマナーの例と食物禁忌（タブー）の例
(ウ) 「関係様式」という考え方（対人と対自然）

大学院入試勉強会クマグス
2008 年 10 月 29 日（水）
発表者：近藤祉秋（早稲田大学国際教養学部 4 年）

引用・参考文献

※あいうえお順に配列した

内海博文（1998）「ノルベルト・エリアスと暴力の問題」『ソシオロジ』43-2

----------（1999）「ノルベルト・エリアスと人間像の問題」『年報人間科学』20

エリアス,ノルベルト（1994）社会学とは何か法政大学出版局

----------（1991）『参加と距離化』法政大学出版局

----------（1977）『文明化の過程（上・下）』法政大学出版局

----------（1996）『ドイツ人論』法政大学出版局

----------（1991）『モーツァルト：ある天才の社会学』法政大学出版局

----------（1995）『スポーツと文明化』法政大学出版局

大平章（2001）「ノルベルト・エリアスについて―その生涯と研究」『人文論集』39 早稲田大学法学会

----------（2005）「『定着者と部外者』におけるノルベルト・エリアスの理論的革新性」『Waseda Global Forum』２

----------（2007）「ノルベルト・エリアスとモーツァルト―若き音楽家の肖像　」『Waseda Global Forum』4

----------（2003）「文明化の過程における日本のスポーツ」『ノルベルト・エリアスと 21 世紀』成文堂

小田亮（2000）『レヴィ＝ストロース入門』筑摩書房

川田耕（2001）「国家・道徳・主体」『社会学評論』52-2

サピア.E、B.L.ウォーフ他（1995）『文化人類学と言語学』弘文堂

近森高明（2001）「ノルベルト・エリアスにおける＜発展＞の概念」『ソシオロジ』45-3

野村雅一（1980）「『文明化』についての試論（上）」『国立民族学博物館研究報告』4-4

原田太津男（2006）「近代の社会―人間像批判と社会科学の方法論的刷新」『貿易風』1

マニング,ジュリアン（2003）「駅伝と日本の近代化」大平章編『ノルベルト・エリアスと 21 世紀』成文堂

メネル,スティーブン（1989）『食卓の歴史』中央公論社

山内昶（1996）『タブーの謎を解く』筑摩書房

----------（2005）『ヒトはなぜペットを食べないか』文芸春秋